

15	新潟市立新津第二中学校	22～24
----	-------------	-------

## 平成24年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

発達障害等を含め、障害のある生徒や学校生活において特別な支援が必要な生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成及び指導の在り方に関する実践的な研究開発

### 2 研究の概要

現行の特別支援学級在籍生徒、並びに通常の学級に在籍する、発達障害等を含め、障害や様々な要因により生活・行動面における問題や学習の遅れ、偏りを示すなどの特別に支援が必要な生徒に対して、実態に応じて必要な支援を受けることができる特別支援教室構想の実現に向けた研究を行う。

特別な支援が必要な生徒に対して、「生活・行動面」と「学習面」の『困り感』から類型化し、発達や学校生活上の課題に応じた教育課程を編成する。その中で特別支援教室の機能を有する場として「スタディールーム」（以後「SR」と表す）を開設する。SRにおいては、弾力的な学習集団や指導方法を工夫し、個々の生徒の課題に対応できる指導の在り方を明らかにする。また、特別支援教育の考え方を教育活動全体に浸透させ、校内支援体制を確立するとともに、専門機関との連携を図り、特別支援教育の理念の指針を提案する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

##### ① 研究仮説

当校の研究開発において、めざす生徒の姿を次のように設定した。

めざす生徒の姿

**社会参加に向け、状況を把握し自らかかわっていこうとする生徒**

<そのために必要な力>

- 見る、聞く、感じる等を通して考え、周りの様子に気付く力
- 自分の考えや思いを伝え合い、お互いを理解しようとする力
- 基礎体力をつけ、安定したリズムで生活する力
- 基礎的・基本的な学力

特別な支援が必要な生徒に対して、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程を編成し、特別支援教室で実態に応じて必要な支援を行うことで、上記のような力を生徒に身につけさせることができる。そのことにより、めざす生徒の姿の実現を図っていききたい。

##### ② 具体的な手だて

#### ア 一人一人の教育的ニーズの把握

現行の特別支援学級在籍生徒を仮想的に通常の学級に在籍させた。その上で、全ての生徒の中から「生活・行動面」と「学習面」の両面から見た『困り感』により支援対象生徒を抽出して個別の指導計画を作成した。

## イ 支援対象生徒の類型化

「生活・行動面」と「学習面」の『困り感』により抽出した生徒の実態を分析して、教育課程を3つのタイプ（A、B、Cタイプ）に類型化した。

具体的には、「生活・行動面」では、「日常生活の指導」「自立活動」が必要かどうか、「学習面」では、「生活単元学習」「作業学習」「教科学習における下学年対応」が必要かどうかを基に分類し、それぞれの教育課程を編成した。

AタイプとBタイプは、主に現行の特別支援学級在籍生徒が該当する。Cタイプは、主に通常の学級の生徒が該当する。

## ウ 課題に応じた教育課程の編成

類型化した3つのタイプそれぞれの「基本となる教育課程」を編成した。具体的には、個別の指導計画に基づいて、一人一人の実態に応じた教育課程を作成し、支援を行っている。

## エ 特別支援教室の機能を有する場（スタディルーム）の設定

特別支援教室の機能を有する場としてスタディルーム（SR）を開設し、特別な支援が必要な生徒一人一人の課題に対応できるように工夫しながら指導している。

## ③ 期待した成果

### ア 『困り感』の軽減

「めざす生徒の姿」を実現するために、具体的に、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成、障害や様々な要因に配慮した指導法の工夫、SRでの生活単元学習、作業学習、自立活動や教科指導の実践、通常の学級における指導上の配慮等を行う。そのことにより、特別な支援を必要とする生徒の「生活・行動面」「学習面」の『困り感』の軽減・解消や、進路実現に向けての意識の向上を図る。

### イ 特別支援教育に対する教師の理解

特別支援教育に関する校内研修の充実や全校体制での研究実践を通して、全教職員の特別支援教育に対する理解の深まりを期待した。同時に、SRだけでなく、通常の学級における授業をはじめ、すべての教育活動を特別支援教育の視点からとらえ改善することを通して、個々の力量や学校の組織力の向上を図る。

### ウ 地域、保護者の理解

特別支援教育にかかわる学区内の校種間連携、関係諸機関との連携、地域、保護者への啓発活動の推進などを通して、特別支援教育への地域、保護者の理解・協力を得る。

## (2) 教育課程の特例

支援対象生徒の類型に応じた特別な教育課程の編成

### Aタイプ

- ・生活単元学習、作業学習、自立活動を実施
- ・9教科の授業時数をほぼ均等に編成して下学年対応の内容を中心に学習する教育課程

### Bタイプ

- ・自立活動を実施
- ・国語、数学、英語に重点を置き、下学年対応も行う教育課程

### Cタイプ

- ・自立活動を付加した教科指導を実施
- ・必要に応じて下学年対応を行う。

#### 4 研究内容

##### (1) 教育課程の内容

###### ① 基本となる教育課程の内容

3つのタイプの基本となる教育課程の内容（SRでの主な指導内容）	
Aタイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活単元学習、作業学習を通して、日常生活に必要な知識や技能を習得する。</li> <li>自立活動を中心とした学習を通して自己理解を広げるとともに、他者とかかわるためのスキルを高める。</li> <li>ボディイメージの把握や、体づくりのためのさまざまな運動を通して、基礎体力の向上をめざす。</li> <li>9教科（国・社・数・理・音・美・保体・技家・英）の授業時数をほぼ均等に編成して学習し、日常生活にかかわる基礎的な知識の幅を広げる。</li> </ul>
Bタイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校生活全般を通して、日常生活に必要な知識や技能を習得する。</li> <li>自立活動を中心とした学習を通して自己理解を深めるとともに、他者の思いに気づき、お互いの立場に立って活動するためのスキルを習得する。</li> <li>国・数・英に重点を置き、下学年対応も含めて基礎的・基本的な学力の向上をめざす。</li> </ul>
Cタイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活・行動面や学習面での『困り感』の要因を分析し、『困り感』を軽減していくような指導や活動（自立活動）を取り入れる。</li> <li>通常の学級とほぼ同じ授業時数で、基礎的・基本的な内容に重点を置いて学習する。</li> <li>5教科（国・社・数・理・英）のうち、特に支援が必要な教科をSRで学習する。</li> <li>必要に応じて下学年対応を行う。</li> </ul>

###### ② 3つのタイプの授業時数

[Aタイプの授業時数の例 今年度1年生] \*太字ゴシックは通常の授業時数の変更部分

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	道徳	学活	総合	自立	作業 日生	生単	計
通常の学級	4	3	4	3	1.3	1.3	3	2	4	1	1	1.4				29
生徒1	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2.3</b>	<b>2.3</b>	3	<b>4</b>	<b>2</b>	1	1	1.4	<b>1</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	29
生徒2	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2.3</b>	<b>2.3</b>	3	2	<b>2</b>	1	1	1.4	<b>2</b>	<b>2</b>	<b>2</b>	29

\*日生：日常生活の指導

[Bタイプの授業時数の例 今年度3年生] \*太字ゴシックは通常の授業時数の変更部分

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	道徳	学活	総合	自立	計
通常の学級	3	4	4	4	1	1	3	1	4	1	1	2		29
生徒1	<b>4</b>	<b>2</b>	<b>5</b>	<b>2</b>	1	1	3	1	<b>5</b>	1	1	2	<b>1</b>	29
生徒2	3	<b>2</b>	<b>5</b>	<b>3</b>	1	1	3	1	<b>5</b>	1	1	2	<b>1</b>	29

[Cタイプの標準授業時数の例]

学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	道徳	学活	総合	自立	計
1	4	3	4	3	1.3	1.3	3	2	4	1	1	1.4		29
2	4	3	3	4	1	1	3	2	4	1	1	2	*	29
3	3	4	4	4	1	1	3	1	4	1	1	2		29

\*各教科、主として太枠で囲ったSRの数学と英語で自立活動を付加した指導を行っている。

### ③ SRでの指導

今年度は、SR1～SR4の4つの教室をSRとして開設し、学年や教科、タイプによって教室を使い分けている。

SRでの主な支援内容は次の通りである。

Aタイプ	自立活動、生活単元学習、作業学習、日常生活の指導 5教科の中から特別な支援が必要な教科 技能教科（通常の学級での補充・補強）
Bタイプ	自立活動、5教科の中から特別な支援が必要な教科（国語、数学、英語は、通常の学級の学習内容の補充・補強も行う）
Cタイプ	自立活動、数学・英語の中から特別な支援が必要な教科

### ④ 自立活動の強化

#### ア 年間指導計画の整備

各タイプの生徒の実態に基づいて継続して指導ができるよう、それぞれの年間指導計画を整備した。

#### イ タイプに応じた自立活動

##### <Aタイプ> 自立活動を2時間設定

- ・Aタイプ単独で、「自他の理解やコミュニケーション能力の向上をめざしたソーシャルスキルトレーニング」が中心。特別支援教育担当が担当。
- ・Bタイプと合同で、体力向上をめざし、「運動量の確保やスムーズな身体の使い方」が中心。保健体育教師が担当。

##### <Bタイプ> 自立活動を1時間設定

- ・Aタイプと合同で、体力向上をめざし、「運動量の確保やスムーズな身体の使い方」が中心。保健体育教師が担当。
- ・SRでの教科指導でも、自立活動を付加した指導を行う。特別支援教育担当と教科担任が担当。

##### <Cタイプ>

- ・教科指導、特にSRでの数学、英語で自立活動を付加した指導を行っている。中でもSRでの英語では、「自他の理解やコミュニケーション能力の向上をめざしたソーシャルスキルトレーニング」を取り入れた活動を意図的に行っている。特別支援教育担当と教科担任が担当。
- ・必要に応じて、SRでの授業中や放課後などに、個別に自立活動を行う。特別支援教育担当が担当。

### ⑤ 個別の指導計画（二中モデル）の作成

	作成対象	ねらい
教育支援シート	A・Bタイプ	○生育歴、保護者・生徒の環境把握 ○『困り感』の理解 ○家庭、医療、福祉、地域の関係機関との連携
実態把握シート	全タイプ	○生徒の多面的な実態把握と諸調査結果の記録 ○生徒の環境把握 ○『困り感』の理解
教科別支援シート	全タイプ	○学習場面における教科学習と自立活動の目標の明確化、 具体的な支援と評価
自立活動支援シート	A・Bタイプ	○自立活動の目標の明確化 ○学校生活全般における職員 の連携による自立活動の支援と評価

\* 「教科別支援シート」は、各教科の年間指導計画の役割を兼ね、評価にも活用する。

\* 作成にあたっては、特別支援教育担当だけでなく、学級担任、教科担任、TT教師が協力して行った。

## ⑥ SRにおける教科学習

### ア 個別の指導計画に基づいた目標設定

個別の指導計画に基づき、前期・後期の初めに、各教科の目標を設定する。A・Bタイプは「教科別支援シート」、Cタイプは「到達度シート」に個別の目標を設定し、評価にも活用する。

### イ 教科担任制の推進

全タイプ、全教科可能な限り専門の教科の免許を所有する教師が指導している。

### ウ 通常の学級での補充・補強

Aタイプの生徒は、通常の学級で技能教科の授業を受けている。SRではその補充・補強的な内容の学習を行っている。（どちらも教科担任）

Bタイプの生徒は、国語・数学・英語については、通常の学級の学習内容とほぼ同じ内容をSRで学習している。（教科担任）さらに時数を増やし、SRで補充・補強的な内容の学習を行っている。（特別支援教育担当）

### エ 複数タイプ合同授業

AタイプとBタイプは自立活動を1時間合同で行っている。また、BタイプとCタイプは、数学と英語を合同で行っている。

### オ 自立活動を付加した教科指導（TTによる指導）

各教科の指導の中で、教科担任が自立活動を付加した指導を行っている。特に、CタイプのSRでの数学、英語では、特別支援教育担当がTTとして授業に参加し、自立活動の指導、助言や生徒の実態把握に努めている。特別支援教育担当が参加できない場合は他の教師がTTとして参加し、教科指導の中心は教科担任、自立活動の中心はTT教師というように、主となる役割を分担している。また、TT教師は、「学習面」「生活・行動面」の両面から、毎時間の授業記録をとる仕事も行っている。

### カ ワークシートの工夫

学習のポイントが分かりやすいように枠で囲み、字の大きさやフォントなどを変えて、大切なところを強調した。また、吹き出しや図などを用いて、視覚的な理解が進むよう工夫し、説明を加えたりした。生徒が一人で、学習のポイントを参考にしながら問題を解いていけるように練習問題を作成した。

### キ 特別支援学級での指導法や教材の活用

これまでの特別支援学級で行ってきた手法や教材を取り入れた。教科担任が作成したワークシートの他に、特別支援学級担当や介助員が作成したカードやプリントなどを活用し、丁寧な指導を心がけている。また、自立活動の面からも、注意すべきことを書いた掲示物やカードなどを作成し、使用している。

## ⑦ 評価

支援対象生徒の評価を、①「評定」＝「指導要録や通知表の評価、評定」と②「パーソナル評価」＝「個別の指導計画に基づいた個人内評価」の2つに分けて考えることにした。

### ① 評定（指導要録、通知表の評価、評定）

絶対評価 通常の学級と同じ評価規準・基準で5段階評定、観点別ABC評価  
\*時数や指導法の違いがあってもよい。

### ② パーソナル評価（個人内評価）

個別の指導計画に基づいた評価で、途中の達成度やプロセスを見るもの。達成度をABCで評価し、文書表記を併記する。自立活動の観点からも評価する。  
⇒生徒及び保護者に知らせる。（保護者には7月、12月の保護者会で）

	A、Bタイプ	Cタイプ
通常の学級で授業を行う教科	①評定	①評定
S Rで通常の学級とほぼ同じ内容を学習する教科	②パーソナル評価： 「教科別支援シート」	①評定 ②パーソナル評価： 「到達度シート」
S Rで下学年対応を行う教科	②パーソナル評価： 「教科別支援シート」	

## (2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>&lt;研究基盤の確立と第一次実践研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究計画の策定（研究企画委員会、校内委員会）</li> <li>・本研究に沿った特別な支援を必要とする生徒の教育課程の編成</li> <li>・運営指導委員会をはじめとした校外、校内の研究組織づくり</li> <li>・特別な支援を必要とする生徒の実態把握と支援対象生徒の決定</li> <li>・文科省の連絡協議会参加</li> <li>・個別の指導計画の作成と実践（授業研究を含む）</li> <li>・支援対象生徒に対する通常の学級における学習機会の付与</li> <li>・特別支援教室システムの立ち上げ</li> <li>・各種研修会や広報活動の実施</li> <li>・文献研究と研修視察等（他校、連絡協議会等）</li> <li>・学校施設・設備の検討と改善</li> <li>・第一年次実践研究のまとめと次年度計画策定</li> <li>・研究開発学校研究協議会参加</li> </ul>
第2年次	<p>&lt;実践研究の見直しと第二年次実践研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究計画の確認（校内委員会、運営指導委員会等）</li> <li>・本研究に沿ったA～Cタイプの生徒の教育課程の改善と実践</li> <li>・特別支援教室システム及び個別の指導計画の改善と実践</li> <li>・S Rにおける学習集団の弾力的な編成と実践の充実</li> <li>・A・Bタイプの支援対象生徒に対する通常の学級における特別な支援の実践</li> <li>・文献研究と研修視察等（他校、研究発表会等）</li> <li>・中間報告会</li> <li>・第二年次実践研究のまとめ（中間実践報告書作成）と次年度計画策定</li> <li>・研究開発学校研究協議会参加</li> </ul>
第3年次	<p>&lt;実践研究のまとめと研究成果の公表&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究計画の確認（校内委員会、運営指導委員会等）</li> <li>・本研究に沿った特別支援教室（S R）の教育課程の改善と実践（授業研究・公開を含む）</li> <li>・特別支援教室（S R）における学習集団の弾力的な編成と実践</li> <li>・A・Bタイプの支援対象生徒に対する通常の学級における特別な支援の実践</li> <li>・広報活動の実施</li> <li>・研究報告会</li> <li>・研究開発学校研究協議会参加</li> </ul>

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援対象生徒の学習成果物 N R T 学力検査の実施 (4月：全学年) 定期テストの実施 (6月、9月、11月、2月) Q-Uテストの実施 (7月、11月)</li> <li>・ 行動観察記録等への分析評価 授業担当による授業後の観察記録</li> <li>・ 教職員の内部評価 授業担当アンケートの実施 (11月、2月) 校内研修会におけるアンケートの実施 (8月、9月、11月)</li> <li>・ 支援対象生徒の自己評価 支援対象生徒に対する自己評価アンケートの実施 (10月、11月、3月)</li> <li>・ 支援対象生徒保護者の外部評価 支援対象生徒保護者に対する S R 評価アンケートの実施 (10月、3月)</li> </ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援対象生徒の学習成果物 N R T 学力検査の実施 (4月：全学年) 定期テストの実施 (6月、9月、11月、2月) Q-Uテストの実施 (5月、11月)</li> <li>・ 行動観察記録等への分析評価 授業担当による授業後の観察記録 学級担任、生徒指導担当、学年コーディネーターによる観察記録</li> <li>・ 教職員の内部評価 授業担当アンケートの実施 (5月、11月、2月) 校内研修会におけるアンケートの実施 (8月、9月、11月) 通常の学級の教科担任、特別支援教育担当に対する交流及び共同学習にかかわるアンケートの実施 (7月、11月) 特別支援教育に対する意識調査の実施 (4月、11月)</li> <li>・ 支援対象生徒の自己評価 支援対象生徒に対する自己評価アンケートの実施 (7月、11月、2月)</li> <li>・ 支援対象生徒保護者の外部評価 支援対象生徒保護者に対する S R 評価アンケートの実施 (7月、10月、2月) 学校評議員や運営指導委員会等関係者、P T A 役員等による外部評価 (2月)</li> </ul>
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援対象生徒の学習成果物 N R T 学力検査の実施 (4月：全学年) 定期テストの実施 (6月、9月、11月、2月) Q-Uテストの実施 (5月、11月)</li> <li>・ 行動観察記録等への分析評価 授業担当による授業後の観察記録 学級担任、生徒指導担当、学年コーディネーターによる観察記録</li> <li>・ 教職員の内部評価 授業担当アンケートの実施 (7月、2月) 通常の学級の教科担任、特別支援教育担当に対する交流及び共同学習にかかわるアンケートの実施 (7月、2月) 特別支援教育に対する意識調査の実施 (7月、2月)</li> <li>・ 支援対象生徒の自己評価</li> </ul>

	支援対象生徒に対する自己評価アンケートの実施（7月、11月、2月） ・支援対象生徒保護者の外部評価 支援対象生徒保護者に対するSR評価アンケートの実施（7月、10月、2月） ・学校評議員や運営指導委員会等関係者、PTA役員等による外部評価（2月）
--	--

## 5 研究開発の成果

### （1）実施による効果

#### ① Aタイプ、Bタイプの生徒への効果

##### ア 生活・行動面での効果

- ア) 通常の学級で生活する時間が増え、集団内のルールを意識して行動する機会が増えた。
- イ) 通常の学級の友達と同じように活動したいという気持ちが大きくなり、行動にメリハリが見られるようになった。
- ウ) 困ったとき、自分が（教師に）確認しなければならない状況が増え、質問の仕方などを教えてもらい、行動するようになった。
- エ) 困ったときの対処法などを経験を通して学んだことにより、生活に落ち着きが見られるようになった。
- オ) 学級や委員会活動などで、ペアの友達からの励ましで役割を果たすことができた。周囲の友達の言葉であれば、素直に受け入れることができた。
- カ) 3年生は、介助員や特別支援教育担当の支援がなくても、通常の学級の生徒と一緒に行動できるようになった。修学旅行では、班の仲間と協力して班別自主研修を行うことができた。

##### イ 学習面での効果

＜Bタイプ生徒（1年生）通常の学級における苦手教科（英語）の例＞

小学校の時はほとんど特別支援学級で授業を受けていたが、教科担任が特別支援教育担当と連携しながら支援することで、通常の学級でもやれることが増え、自信をつけてきた。

できるようになったこと	効果的な支援の内容
ノートがとれるようになった	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ノートのとり方を示す。</li> <li>・事前に手本を渡し、そのまま書き写せばよいことを確認。</li> <li>・板書事項の焦点化（赤枠で囲んだ部分だけを書く）。</li> <li>・上手に書いてある生徒のノートを見本に見せる。</li> </ul>
単語や文章が読めるようになった 分からないときは自分で周りの人に聞いて答えるようになった	<ul style="list-style-type: none"> <li>○事前に、読み方付きのプリントを渡しておく。 →学習内容を前もって示し、安心して授業に参加できるようにする。</li> <li>○単語の読みの練習などの時は、パターンを決め、自分が何をしたらいいかが分かるようにした。</li> </ul>
ペア学習ができるようになった スピーキングテスト、音読練習、文型練習、インタビュー活動等	<ul style="list-style-type: none"> <li>○活動をできるだけパターン化し、事前にモデルを示す。</li> <li>○周囲の友達からの誘いや励ましの言葉。できたらほめる。</li> <li>○できるまで「待つ」姿勢。</li> <li>○友達と一緒にできたという思いを共有させる。</li> </ul>
ALTにインタビューができた	<ul style="list-style-type: none"> <li>○グループ活動等で、自分もしなければいけない状況と雰囲気を作る。</li> <li>○こだわりが強いので、本人が本当に質問したいことを教師が聞き取り、それを英語に直して質問シートに記入させる。</li> <li>○ALTに質問する前に十分に練習させ、自信をつけさせる。</li> </ul>
できないと思い込んだときは机に伏せて何もしなかったが、どの活動も最後までやれるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○UDLを取り入れ、活動内容や手順を明確にした。</li> <li>○本人の特性を理解し、声のかけ方や支援の方法を工夫した。</li> <li>○やれたことをほめ、自信をつけさせた。</li> <li>*できることが増えた。→自信→自分にもできる。次もやってみよう。</li> </ul>



## ② Cタイプの生徒への効果

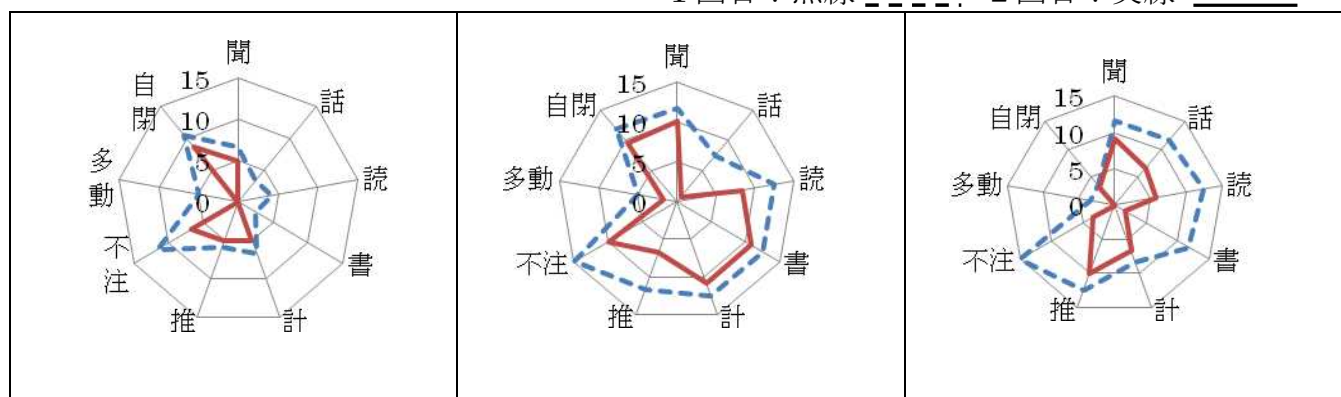
### ア 生活・行動面での効果

ア) SRという少人数集団の中で自立活動を付加した指導を行うことで、仲間との人間関係作りが少しずつ上手くなっており、嫌なことを我慢できるようになった。また、自分や他の生徒のよいところや悪いところを客観的に見ることができるようになってきており、人間関係のトラブルが減った。

イ) 新潟市チェックリストの結果、改善が見られた生徒が多い。

<現3年生3名の抽出生徒 1回目(H23.2月)と2回目(H24.3月)の比較>

1回目：点線 - - - - - 2回目：実線 \_\_\_\_\_



1回目に比べ、2回目はほとんどの生徒の数値が低くなっている。特に、「不注意」「多動」「書く」の数値が低くなっている生徒が多い。

### イ 学習面での効果

<生徒アンケート結果> 現3年生(H22.9月SR開始)

Q1 あなたは数学、英語が好きですか。

	数 学				英 語			
	はい	どちらかという うとはい	どちらかという うといいえ	いいえ	はい	どちらかという うとはい	どちらかという うといいえ	いいえ
SR開始前	25.0%	12.5%	25.0%	37.5%	14.3%	57.1%	14.3%	14.3%
H23.4月	7.7%	30.80%	61.5%	0.0%	33.3%	22.2%	33.3%	11.1%
H24.3月	15.4%	46.2%	30.8%	7.7%	10.0%	70.0%	10.0%	10.0%
H24.7月	9.1%	81.8%	0.0%	9.1%	20.0%	60.0%	10.0%	10.0%

Q2 あなたは数学、英語の授業がどの程度分かりますか。「よくわかる」を10とするとあなたはどのくらいだと思いますか。(数値は平均値)

	SR開始前	H22.10	H22.12	H23.4	H23.7	H23.11	H24.3	H24.7
数 学	4.3	7.0	7.6	4.8	6.8	8.2	6.9	6.8
英 語	3.4	6.4	7.2	6.8	7.7	7.8	6.9	6.1

\*H23年4月は、新規SR入室者が多かったため、数学、英語ともに数値が下がった。

Q3 SRに来てよかったと思うことはどんなことですか。(抜粋)

- ・通常の学級の授業より分かりやすいし、覚えやすい。
- ・丁寧に教えてくれるので、分からないところができるようになった。
- ・できないものも何度か繰り返す度に分かってきて、徐々にできるようになってくる。
- ・通常の学級での授業より、分からないところを聞きやすい。
- ・数学(英語)が嫌いだったが、分かるようになって楽しくなった。授業が楽しい。
- ・集中力がついた。授業中しゃべらなくなった。寝なくなった。

### ③ 教師への効果 <教師アンケート結果より抜粋>

#### ア 学習指導に関して

ア) 「やらない」のではなく「できない」、「覚えられない」ではなく「覚えられない」、「すぐ忘れる」のではなく「記憶できない」という視点で指導方法を工夫するようになった。

イ) どういうところをつまずくのかを常に考えるようになった。(学習内容なのか、発問、説明の理解なのかなど様々な要因を考えるようになった。)

ウ) 口頭での指示だけでなく、活動の手順や方法を板書し、視聴覚教材や実物、具体例などを示しながら説明することが多くなった。

ユニバーサルデザインに関するアンケート12項目平均(5段階評価)	H23.5	H23.11	H24.7
	3.6	3.8	3.9

\*H23.5(UDL研修前)に比べ、12項目中11項目の数値が向上

#### イ 生徒指導に関して

ア) 授業中や休み時間に、生徒(特にSRの生徒)を注意してみるようになった。

イ) 今までよりも生徒の話をよく聞くようになった。

ウ) なるべく怒鳴らないようになった。声を荒げることが少なくなった。

ユニバーサルデザインに関するアンケート6項目平均(5段階評価)	H23.5	H23.11	H24.7
	3.8	4.0	4.1

\*H23.5(UDL研修前)に比べ、6項目全ての数値が向上

## (2) 実施上の問題点と今後の課題

### ① 教育課程の視点から

ア 当初は、全学年A、B、C全てのタイプの生徒を対象にSRを開設する予定であった。しかし、現状の教科別教員数では、現在と同じ方法での全学年全タイプSR開設はむずかしい。当校の規模では、SR開設教科の教師が5名以上いれば3学年同時開設は可能であるが、4名では2学年同時開設が限界である。

イ 今年度は、SR開設を1年生後期から3年生前期までとした。そのため、3年生後期から支援対象生徒が通常の学級に戻ったが、戻ってからの支援方法やSR開設期間が適切かどうかなどの課題が残った。

### ② SRでの支援の視点から

ア SRの入室については、生徒や保護者への説明の仕方や声のかけ方で理解が違ってくる。誰がどのタイミングでどのように説明するかが大切である。

イ 支援対象生徒の評価について、当校独自の評価方法を提示したが、評価方法や評価内容の妥当性についての検証がまだ不十分である。

ウ 支援が必要な生徒がSR入室を希望しない場合の支援の仕方についての検証が不十分である。通常の学級でもUDLを取り入れたり、TT、学生ボランティアの活用などで対応したりしているが、まだ不十分である。

### ③ 研究体制、職員体制の視点から

ア 校内研修で職員の特別支援教育に対する理解の浸透を図った。しかし、実際にSRでの指導を経験したかどうかや支援対象生徒とのかかわりの度合いなどにより、意識に差がある。

イ 多数の教師がSRにかかわるようになったため、定期的にケース会議を開いて情報交換をする必要が生じたが、日程等の調整が難しく開けないことが多かった。